

## モンゴル・シャマニズム「九つの試練」について

— ホルチン地域の事例から —

張 高 娃

ZHANG Gaowa

非文字資料研究センター 2019年度奨励研究採択者  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】シャマニズムの再活性化を背景に、ホルチン地域ではブォに生まれ変わるとする入巫儀礼が復活しつつある。ブォとは、ホルチン地方におけるシャマンの総称である。この入巫儀礼は、イスン・ダバ・ダバホ（九つの試練を通る）儀礼と呼ばれる。一説では、「イスン・ダバ（九つの試練）を通らないと本物のブォではない」、「重い病気（強い悪霊）を治療することができない」ともいわれる。このように、ブォがイスン・ダバを通ることは、ブォを社会的に一人前のブォとして認めるか否かの一つの基準となっている。ブォの話によると現在、儀礼はあまり行われなくなったという。それは、ブォが長い間弾圧を受けたため、霊力の強いブォが少なくなったことや、儀礼が迷信扱いされ法的制限を受けたことが大きく影響している。2012年以降、経験を積んだブォは、自宅で自らイスン・ダバ・ダバホ儀礼を行うようになった。筆者は2019年旧暦7月7日に、ホルチン地域のダルハン旗で行われた儀礼に参加することができた。

1930年代から約90年ぶりに、イスン・ダバ・ダバホ儀礼は復活した。時代の経過とともに儀礼は簡素化され、かつては鋭かった針尖と刀刃も以前ほどの鋭さはない。しかし、イスン・ダバの中心となる要素「火・熱さ・刃物」に変化はない。

イスン・ダバ・ダバホ儀礼は、刃の荒行から始まる。それは刀の刃を抑える力と治療の霊力を表現している。次に、ブォは火を操り支配する。そのことにより、神秘的な内的熱を獲得・蓄積し、荒々しい破壊力である火の本性を内的巫力に変化させる。火に耐えられる体は、シャマンの欠かせない必要条件である。シャマンは、火の本性を内的巫力に変えることのできる人物である。イスン・ダバ・ダバホ儀礼では、火に関する試練が最も多い。このことは、ブォが火の統御者であることを端的に表している。儀礼の最後に、刀が付いた梯子の頂点に登る。このことは、普通の人間から守護霊の力をもつブォとして生まれ変わり、霊界に身を置いたことを象徴している。こうしたイスン・ダバ・ダバホ儀礼の復活は、ブォ文化伝承の大きな契機となるだろう。また、ホルチン・モンゴル人の伝統文化保護という意識を刺激することにもなっていく。ブォが社会的地位を得ることにより、シャマニズムは活性化し、その継承者の養成も可能となる。

本論の目的は、イスン・ダバ・ダバホ儀礼の概要を述べ、その内包する役割を明らかにすることである。さらに、そのことは卒業論文でブォの社会的な機能を考察する上でも、最も重要な位置付けにあると考えている。そのために、文献調査とフィールドワークを基に、実際に体験した儀礼の分析を試みた。

The Nine Tests of Mongolian Shamanism  
— A Case Study from the Khorchin Region —

**Abstract :** With the revival of shamanism in the Horchin region of Mongolia, the shaman initiation rite, or the ritual for becoming a “Boo”—a collective term used in this part of the world for shamans – is also making a comeback. The initiation rite is called *yisun dabaa dabah*, or the passing of the nine tests, and the view is held that one cannot become a true shaman or acquire the ability to heal serious illnesses (strong evil spirits) without undergoing these trials. As such, the completion of *yisun dabaa* is considered a requisite measure of a fully qualified boo in Khorchin society.

According to one boo, the initiation rituals are not practiced very often today, largely because the population of boos with strong spiritual power has declined as a result of long-term political repression against shamanism, and the rituals, now regarded as superstition, have been legally constrained.

After 2012, however, an experienced boo began to conduct *yisun dabaa dabah* at home. I had an opportunity to participate in a ceremony held on July 7, 2019 (in the old calendar) in the town of Darkhan in Horchin.

The ritual of *yisun dabaa dabah*, last conducted in the 1930s, was revived after some 90 years. Over time the procedure has become simplified, and the needles and sword blades used in the ceremony are not as sharp as they once were. Nevertheless, the central elements of *yisun dabaa* remain the same – flame, heat, and blades.

The ceremony begins with ascetic exercises using sword blades. This portion of the ritual represents the ability to control the blades as well as the psychic power of healing. Next, the boo candidate manipulates and controls a flame to gain and accumulate within himself the mystical internal heat, and to transform into an internal shamanic power the raging destructive force that is the original nature of fire. A body that can withstand fire is imperative for shamans, as they are defined as people who can turn the nature of fire into shamanic power. The fact that the ritual of *yisun dabaa dabah* has more tests involving fire than any other kind is a clear indication that boos are the masters of fire. In the final portion of the initiation rite, the candidate climbs to the top of a blade ladder. This exercise symbolizes that the initiate, formerly an ordinary mortal, has been reborn as a boo possessed with the power of a guardian spirit and has joined the world of spirits.

The revival of the initiation rite will be a major impetus to preserve the shamanic culture and its traditions. It will also promote greater awareness about protecting the culture and traditions of the Horchin Mongolians. As boos gain a respectable position in society, shamanism will flourish and in turn facilitate the development of its successors.

The purpose of this paper is to provide an outline of the *yisun dabaa dabah* ritual and shed a light on the role and meaning of its elements. I believe this is the most important step in examining the social functions of boos, a task I intend to undertake in my dissertation. For this purpose, based on literature research and fieldwork, I have analyzed the initiation rite in which I personally participated.

## はじめに

現在、シャマニズムの再活性化を背景に、ホルチン地域では普通の人からブォ<sup>(1)</sup>に生まれ変わろうとする入巫儀礼が復活しつつある。その中で注目すべきなのはダバ・ダバホ<sup>(2)</sup>（試練を通る）儀礼である。

ホルチンでは、1950年代まで、ホス・ダバ（二つの試練）、ドロソ・ダバ（七つの試練）、イスン・ダバ（九つの試練）を通る儀礼が行われていた。サラゴワは「1950年代以降、中断されていた儀礼の一部を1999年に今は亡きホブル・ブォが復活させたが、1945年以降、イスン・ダバ・ダバホ（九つの試練を通る）儀礼は公式には行われていない」（サラゴワ2019:358）と述べている。イスン・ダバ・ダバホ儀礼は、ホルチン・シャマニズムや民衆の中では、最も高位な儀礼とされている。そこには九つの試練があり、一つの試練を9回繰り返して行う。イスン・ダバ・ダバホ儀礼は盛大な祭典であるとともに、モンゴル社会では普通の人間からブォになる再生儀礼として認識されている。新米ブォは、イスン・ダバ・ダバホ儀礼に参加することでブォとしての力を強め、一人前のブォとして生まれ変わっていく。また、すでに一人前になったブォでも、ダバ・ダバホ儀礼に参加すればするほど、霊力が強くなるともいわれる。イスン・ダバ・ダバホ儀礼は、二つの意味をもっている。一つは、普通の人間がブォとして生まれ変わるという再生儀礼である。二つ目は、試練を通ることにより守護霊から保護されている者となり、民衆からブォになったことを認められることである。

一説では「イスン・ダバを通らないと本物のブォではない」、あるいは「重い病気（強い悪霊）を治療することができない」ともいわれる。このように、イスン・ダバを通ることは、ブォを社会的に一人前のブォとして認めるか否かの一つの基準となっていたという（サラゴワ2019:359）。しかし、ホルチン・シャマニズムの世界では、必ずしもブォになるための標準的基準があるわけではない。老ブォも、基準があるという意見には同意してない。「守護霊が強ければイスン・ダバを通らなくても、重い病気を治療することができる」、あるいは「守護霊が強ければ、夢の中でイスン・ダバを通ることができる」とされる。老ブォの話によると、ブォは長い間弾圧を受けたため、霊力が弱まっているという。かつてのように糸のように細い刃の上を歩いたり、煮えたぎる油に手を入れたりすることはできない。守護してくれる守護霊が、昼の星のように見えづらく少なくなったからだという。満昌は、イスン・ダバ・ダバホ儀礼には、「地域によって違うが、最低でも儀礼を通った4人から8人のダバン・バッシの監督が必要である」（満昌2014:134）という。霊力が強いブォは少なくなり、儀礼は迷信扱いされたため、現在、儀礼ではあまり行われなくなった。しかし、2012年以降になると、経験を積んだブォが自宅で自らイスン・ダバ・ダバホ儀礼を行うようになった。筆者は、シャマニズムに関するフィールドワークは2017年から始め、2017年と2018年に何回もホルチン地域で現地調査を行い、その結果とする報告<sup>(3)</sup>がある。したがって、今回2019年旧暦7月7日にホルチン地域のダルハン旗で行われた儀礼に参加することができた。本論で分析するイスン・ダバ・ダバホ儀礼は、モンゴル・シャマニズムの世界で最も重要な役割を果たしている。

本論の目的は、イスン・ダバ・ダバホ儀礼の概要と、社会的機能を明らかにすることである。そのために、文献調査とフィールドワークを基に、実際に体験した儀礼の分析を試みた。なお、本論に掲載した写真は、すべて筆者が撮影したものである。

## I 調査地の概況

ホルチン地域は中国内モンゴル自治区東南部に位置し、北緯 42° 15′ ~ 45° 41′、東経 119° 15′ ~ 123° 43′ の間にある。総面積は 59,540 平方キロメートルで、南北 418 キロメートル、東西 370 キロメートルに及ぶ。東は吉林省と隣接し、西は赤峰市、南は遼寧省、西北と北はそれぞれシリントグ・アイマグ（区）、ヒンガン・アイマグと隣接している。中国の東北地方と河北地方の交差点にあたる。地勢は低丘陵地帯や傾斜面平地帯で、海拔 1000 ~ 1400 メートルほどである。気候は温帯大陸性季節風気候で、「春旱魃がよく風が吹く。夏は高温でよく雨が降る。秋は涼しくて雨が少ない。冬は寒くて雪は少ない」といわれる。ホルチン地域の総人口は 308.3 万人、そのうちモンゴル人口は 143.9 万人で、総人口の 46% を占める。また中国にいるモンゴル人の 4 分の 1 がホルチンに集まっている。ホルチン地方には、ダルハン・ホシヨウ（旗）、フレ・ホシヨウ、ジャロト・ホシヨウ、ホイト・ホシヨウ、ナイマン・ホシヨウ、開魯県がある（図 1）。本論の調査地は、筆者の故郷であるダルハン・ホシヨウ（図 2）である。2010 年の統計によるとダルハン・ホシヨウの総人口は 54 万人、そのうちモンゴル人は 39.5 万人で総人口の 73.6% を占める。面積は、9811 平方メートルである。また、中国のモンゴル人が、最も多くいるホシヨウである。

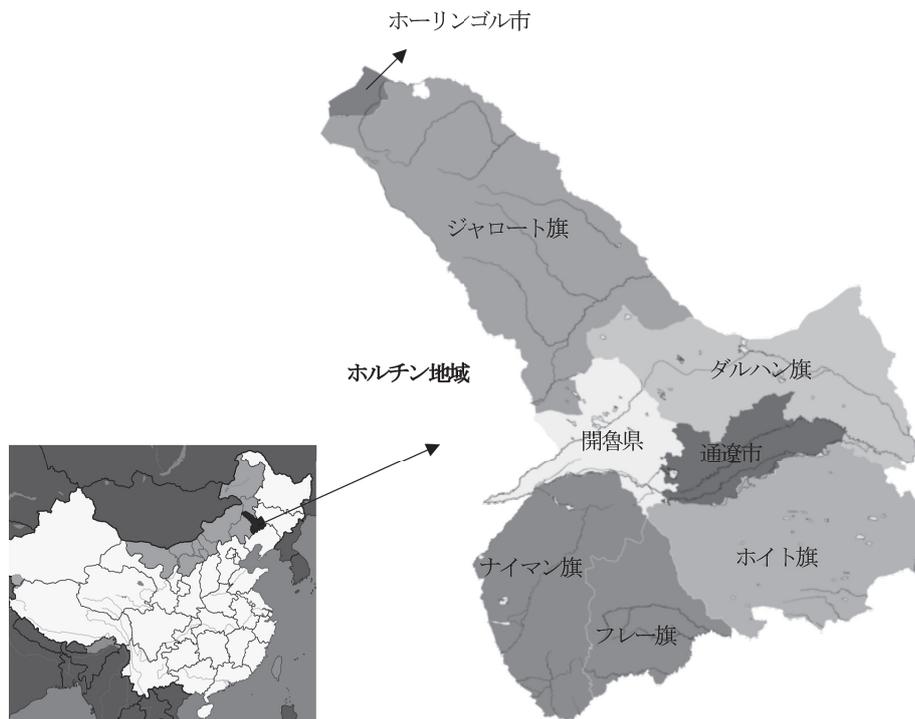


図1 ホルチン地域地図（著者作成）

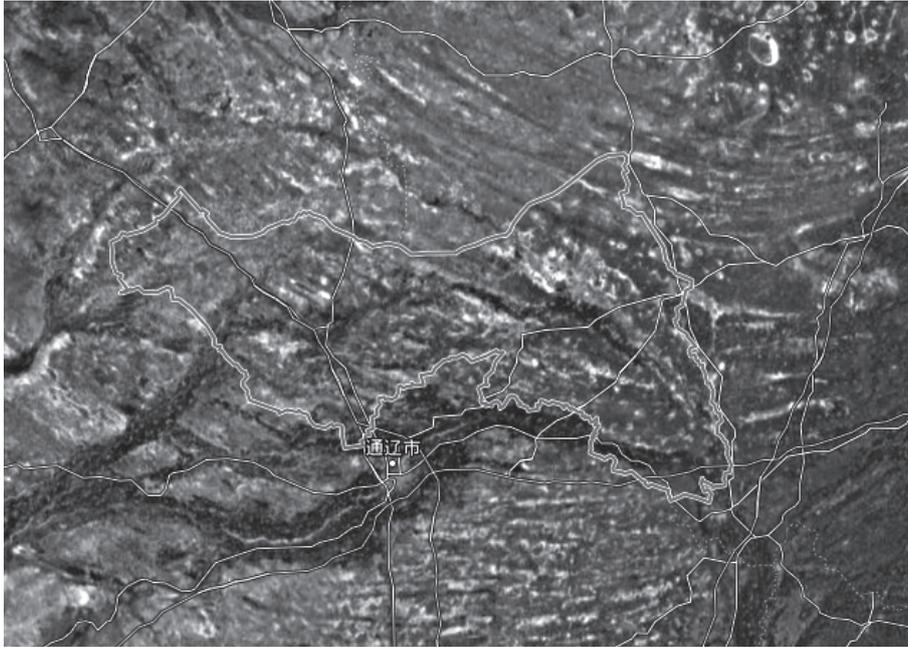


図2 ダルハン旗の位置（著者作成）

## II イスン・ダバ・ダバホ儀礼の準備

### (1) 儀礼の日と参加の要件

ホルチン地域におけるイスン・ダバ・ダバホ儀礼は、毎年「(旧暦) 7月7日」と「(旧暦) 9月9日」に開催される。ダライ・ブォの話によると、その日にテングリ（天）は門を開き、すべての精霊が世の中に降りてくるという。また、その日は守護霊が後継者に憑依するめでたい日として重んじられてきた。さらに、新米ブォの守護霊が、この日に「口を開く」と伝えられている。この時期に開催される理由について、サラングワは「この時期は、モンゴル人にとって五種類の宝物の家畜（馬、牛、駱駝、羊、山羊）が肥えて、よく育つときだからである」（サラングワ 2019：360）という。守護霊は、晩夏初秋に天地や故郷の川を加護するため、植物はよく茂り、五畜も肥えてくる。こうした時期に儀礼を行い、そのエジド（主）たちに供え物を捧げて感謝するのである。

試練を通る新米ブォが、イスン・ダバ・ダバホ儀礼に参加するには、一定の要件が必要となる。そのことについて、満昌は次のようにいう。「1週間ほどで、タルニ（呪文）を完成させる必要がある。タルニ（呪文）を完成させるとは、新米ブォが修行を終えることを意味する。ダバン・バッシの話では修行期間は49日、100日で、時によっては何年間もかかる場合がある。その上でダバン・バッシの指示により、お墓の所でタルニを完成させる」（満昌 2014：134）。

また、儀礼に参加するブォは22日間、家に帰ってはいけない。会場で寝泊まりする。この時期は、「隔離」の時期であるといえる。22日間練習を重ね、23日目が本番となる。しかし、2019年の筆者のフィールドワークによると、タルニは完成されていないようにみえた。イスン・ダバ・ダバホ儀礼が行われる際に、弟子ブォたちは自ら志願する。司祭者ダライ・ブォによると、かつて儀礼に参加するブォは、牛や羊を差し出していたという。しかし現在では、牛、羊の代わりに参加費として500元支払うようになった。このように、儀礼はかつてとは異なり、現代風に変化しているのである。

## (2) 儀礼の守護霊

イスン・ダバ・ダバホ儀礼で、重要な役割を果たしているのは、ダバン・エジド（儀礼を守護してくれる守護霊）とブォの守護霊、補助霊である。このダバン・エジドは来世にいて、ホルチン・シャマニズムで最も高い地位にある。ダバン・エジドとは儀礼を見守る、ブォの来世にいる6人の師匠である。彼らを囲んでいるのは、チャヒゴル・チャガン・ハダ（火打石の白い岩）である。これはブォの守護霊を招請する際、降臨してきた守護霊に挨拶するときたびたび登場してくる岩である。岩の後ろには、生い茂る1本の松がある。これはブォの亡き霊が座る木である。神話上では、「壇の樹」と語られるが、それは仏教の影響である。松はモンゴル地方では、永遠の命の象徴である。霊魂不死信仰とも関係している。ブォの6人の師匠が登場するのは、イスン・ダバ・ダバホ儀礼の初めに儀礼を取り仕切るブォが、この6人の師匠の守護を乞うためである。6人の師匠は、ブォの来世の監督で、儀礼の守護者である。そのため、ダバン・エジド（試練を通る儀礼の主）と呼ばれる。そして、6人の師匠は儀礼に力を与え、儀礼を守護する。

ダバン・バッシの守護霊と補助霊の霊力は、儀礼の安全を左右する。ダバン・バッシと呼ばれる司祭者の師匠ブォと数人の力のあるブォは、儀礼の監督役を務める。今回の儀礼では、師匠のダライ・ブォと最初の弟子であったダランタイ・ブォが監督を務めていた。ダランタイ・ブォは50代の男性で、自分の弟子ブォももっている。筆者は彼のおかげで、イスン・ダバ・ダバホ儀礼に参加する機会を得た。1980年代にホルチン地域で調査を行った満昌は、イスン・ダバ・ダバホ儀礼において、ダバン・バッシの存在は重要で、儀礼の全面的な責任者だと述べている（満昌1990:41）。試練を通るには、監督ブォが重要である。監督に力があれば、普通の人をも通らせることができるとブォは語る。試練を無事を通ることを祈願する場合、守護霊たちを喜ばせる必要がある。イスン・ダバ・ダバホ儀礼の前日（旧暦）7月6日の夜、星々が空に昇るとともに、守護霊を招請し事前準備が始まる。

## (3) 儀礼前日の行事

儀礼前日にはいくつかの行事が行われる。

ガル（火）をエスグルフ（蹴る） ガル（火）をエスグルフ（蹴る）というのは、ブォの霊力の勢いを誇示する行為といってもいいだろう。最初に、ホジュルのガル（炭火の火）を準備して置く。ホジュルは榆の木を燃やしてできた炭火で、ガルは火である。これもイスン・ダバ・ダバホ儀礼では、一つの試練とされている。ダバン・バッシの庭に、ホジュルのガルを小高い丘のように三つ積み上げる。今回の儀礼には、監督として大弟子のダランタイ・ブォが参加した。ダランタイ・ブォは儀礼を行う前に、心の中で守護霊の加護を祈願し、天、地、守護霊に神酒を捧げる。その後、ブォの服装を着て、太鼓を叩き、神歌を歌う。最後に、素足で三つの小高い丘にあるホジュルのガルを蹴り、炭火の上で踊る（写真1）。この「蹴って踊る」を3回繰り返す。筆者は儀礼終了後に、ダランタイ・ブォの足の裏をみせてもらったが、全く怪我はなかった。ダランタイ・ブォは、怪我がないのは守護霊が降臨し守ってくれるためだという。この儀礼はブォがもっている火をコントロールする力と、守護霊の強い力をアピールするものである。そしてこうした儀礼により、守護霊を喜ばせる意味もあると考えられる。



写真1 ホジュルのガルをエスグルフ（火を蹴る）儀式

**守護霊の招請** 夜になると、ダライ・ブォは自分の守護霊の写真（ダバン・バッシの様子を描かれた絵）を設置している祭壇に、線香と酒を捧げ礼拝する。ダライ・ブォはすでに70代の年配者なので、踊らずに座っているだけである。その後、その大弟子ダランタイ・ブォと集まった人たちが太鼓を叩きながら神歌を歌い、ダバン・バッシと弟子の守護霊を招請する。次に、師匠ダライ・ブォが降臨した守護霊と挨拶を交わす。これは参集したブォたちや参加者にとって、多彩な守護霊たちの表情を観察する絶好の機会となる。ダライ・ブォは、降臨してきた守護霊に、明日の儀礼でブォが無事に通ることを守護してくれるよう祈願する。多くの後継者ブォの守護霊を招待しなければならないため、ダライ・ブォが1人の守護霊と言葉を交わす時間は短いものである。守護霊は、ここで儀礼の参加者や依頼者、見学者たちに、自分の力を誇示する。ここで行われたことはブォと民衆の間で語り草となり、ブォの霊力は高く評価される。守護霊がブォの中に入ると、ブォは守護霊のフルグ（乗り物）となり、守護霊として振る舞う。このようにして降臨した守護霊の様子や、守護霊の好みなどを紹介しよう。好みは守護霊によってさまざまである。

① ダライ・ブォの弟子である、30代の後継者サラの守護霊の好みはタバコである。そのタバコの吸い方は普通ではない。3本のタバコに同時に点火する。火がついているかどうかを確認した後、火の側から吸い込む（写真2）。これをみると守護霊は、生前タバコが大好きだったのかもしれないと別のブォは語る。

② 30代男性の弟子フスル・ブォも、自分の守護霊を招いた。フスル・ブォは、今回師匠ダライ・ブォがこの儀礼の主催者であるため、師匠を手伝う役を担うことになった。フスル・ブォの守護霊の好みは、ホジュルのガルとアラジ（守護霊に捧げる神酒）である。ここでは、アラジを説明しよう。アラジは神々やテングリ（天）、守護霊に捧げる神酒の名称である。守護霊が降臨すると、アラジを御猪口に入れ、それに火をつけてから捧げる。守護霊は火をチェックし、アラジを飲む。何杯飲むのかは、守護霊の要求によるが、今回は3杯飲んだ。こうして、明日の儀礼を加護してくれるように願う。ダ

バン・バッシとの挨拶が終わると、守護霊を送り返す。別の弟子ブォの話によると、このアラジは守護霊が飲むものだが、フルグ（乗り物）の口を借りているだけで、帰るとき飲んだアラジはすべてもって帰る。また、フルグの口にお酒の匂いは残らないという。普通の肉体をもっているフルグの体には、何の影響もない。

③ 30代女子の弟子である、後継者スチンの守護霊である。後継者スチンの守護霊の好みは、ホジュルのガル（炭火の火）である。守護霊が降りてくると、師匠ダライ・ブォが挨拶し、明日、後継者スチンのフルグを無事に通らせるように願う。その後、遠くから来てくれたことに感謝し、アラジを捧げる。守護霊は御猪口でアラジを3杯飲む。次に、守護霊はホジュルのガルを食べたいという。そして、真っ赤なホジュルのガルを吹き、火の粉が飛ぶようにして、ホジュルのガルを提供する（写真3）。そうしないと守護霊は受け取らない。これを七つ食べたころ、ダライ・ブォは弟子の体を心配し、もう十分食べたのだから、これで終わろうという。しかし、守護霊はまだ二つ欲しいと答える。そのとき、ブォのお皿には小さなホジュルのガルが二つあった。それをあげようとする、守護霊はこのホジュルのガルは小さいとして拒否する。その後、大きなホジュルのガルをもらい、満足した。守護霊はフルグの体に病気があることを知っていたため、九つのホジュルのガルを食べ、治療したという。守護霊が帰るときは、後継者スチンの病気をもって帰るのである。



写真2 タバコを火の側から吸い込む



写真3 ホジュルのガルを食べる

④ 最後に、主催者のダライ・ブォの守護霊である。ダライ・ブォは、ホルチン・シャマニズムの分類によるとレイチンにあたる。レイチンとは、座って守護霊を呼ぶ人物である。その服装は、かつて仏教の寺院で活躍したラマ・ブォであるチョイジンと類似している。これは、ホルチン地域での民間の考え方に通じるものである。仏教に帰依し、寺院にいるブォはチョイジン、あるいはグルテムと呼ばれる。仏教に帰依しているものの、民間にいるブォはレイチンである。ダライ・ブォは「自分の守護霊であるお祖父さんはチョイジンであり、寺院で活躍していた」という。ダライ・ブォはレイチンではあるものの、病気の治療を行っている。民衆からみればブォと同じ存在である。そのため、皆は彼をブォと呼んでいる。ダライ・ブォも若いころは、守護霊を招請するとき踊っていた。だが、今は70代の年配者となっているため、踊ることはない。これを守護霊も理解してくれるという。ダライ・ブォは立ち上がり、手のひらを顔・胸の前で合わせる。その間に3本の線香を焚き、手で揺らして拝む。拜んだ後1分も経たないうちに守護霊が降臨する。ダライ・ブォは2、3回ジャンプしてから、

オンドルに座る。ダバン・バッシの守護霊が降りてくると、弟子たちは皆、跪いて参拝する。守護霊は「こんな機会があり、大変喜んでいる。跪いている弟子、子孫たちは起きてください」という。次に、守護霊は、ガルをエスグルフした大弟子ダランタイ・ブォとフスル・ブォの2人を呼ぶ。ダライ・ブォの守護霊の霊力は、神酒を呼ぶ力をもっているとされる。守護霊は1合入りの瓶で神酒をもってくるようにいう。ダランタイ・ブォとフスル・ブォの2人は瓶に入っていた神酒を御猪口につぎ、守護霊に飲ませる。神酒を飲みきると、ダバン・バッシは瓶を手掌で閉じ、揺らしながら呪文を唱える。すると、瓶の神酒は満杯になる。2人の弟子は跪いて礼をし、尊敬の意を示す。儀礼の責任者であるダライ・ブォは、儀礼が順調に進むかどうかを心配する。そのため、守護霊の教えをよく聞くことになる。守護霊は占いをして、儀礼の結果を告げる。それは「儀礼は心配なく無事に進む。しかし、北東から目的がある2人が来る。それだけ気をつければ、儀礼は邪魔されない」というものであった。こうしたお告げをすることが、ダバン・バッシの最大の目的である。

以上四つの事例をみると、守護霊はさまざまな要求を行いながら、ブォの霊力と治療の力を誇示しているように思われる。

#### (4) 供物と祭壇の設置

儀礼は朝早く行われるので、すべての事前準備は、前日に終わらせなければならない。ダライ・ブォは、初めに供犠羊を清める。生きている状態で、供犠羊の各部位を一つ一つ丁寧に清め、神々と守護霊に神歌を歌って奏上する。次に、供犠羊を屠殺するのだが、モンゴルでは血を流さない方法で行われる。供犠羊の胸腔の皮を10センチほど剥ぎ、手を胸腔に入れて、大動脈を切断する。絶命したばかりの供犠羊の内臓を取り出す前に、銅製のオンゴッド（偶像）を供犠羊の胸腔に入れ、生血に浸す。これにより、銅製のオンゴッドの力が活性化されるといわれる。その後、供犠羊の内臓を取り出しておく。深夜になると、丸ごと煮る。朝、煮あげた供犠肉を、生前の姿のように復元する。儀礼が行われる庭に祭壇を設置する。ダライ・ブォは、各方向に向かいテングリ（天）に祈りを捧げる。そして、地やそのほかの神々、守護霊に神歌で供物を捧げ祈祷する。さらに、銅製のオンゴッドに憑依する精霊たちに祈祷し、供犠羊を頭から尾まで、内臓の各部位を順に奏す。ダバン・エジド（儀礼を加護する守護霊たち）、ブォの守護霊たちに祈りを捧げ、儀礼を守護してくれるように願い儀礼を始める。

### III 当日のイスン・ダバ・ダバホ儀礼

ここで、儀礼当日のイスン・ダバ・ダバホ儀礼を紹介する。この儀礼は、ホルチン・シャマニズムの中では、常に最高の試練としてみなされてきた。霊力をもつブォと認められるための儀礼である。近年、シャマンの急速な再活性化により、この儀礼も復活しつつある。儀礼では、「刃物、火、熱さ」が表現されている。これは、ブォがもつ火をコントロールする力を表しているものである。

#### (1) イスン・ダバ（九つの試練）

2019年旧暦7月7日に行われたイスン・ダバ・ダバホ儀礼を取り上げ、九つの試練を説明する。

① 釘（シルヘン）のダバ（写真4） 釘は足の裏と同じように束ねてある。長さ15センチ、幅10

センチである。多くの釘を隙間なく立て、九つの釘の山を並べる。その上を素足で3回歩く。かつては、釘のダバをジェラン・シド（針鼠の針）のダバといい、釘ではなく針を使用した。針を新しいフェルトに9×9の81本、隙間なく立て、その上に上半身裸で9回、転がった。今は女性のブォが多くなったため、代わりに釘のダバにしたという。サランゴワは「このダバのもう1つの呼び方として、「シルヘン・ダバ」ともいう。「シルヘ」は布を構成する織目をさす。「シルヘ+ン」は、「織目の」の意。針の細かさにちなんで与えた名前である」（サランゴワ 2019：359）と述べている。

② 火（ホジュール）のダバ（写真5） 楡の木を燃やした炭火を、長さ3メートル、幅1メートルほど地面に敷く。その炭火の上を素足で3回歩く。以前は、素足でこの火を踏み消すこともあった。かつて、宗教弾圧が行われたとき、霊力の強いブォは3日間火の中にいて、そこから出てきたときは、髭が凍っていたというエピソードもある。

③ 罌（イルルン）のダバ（写真6） 灼熱した九つのこてを3回噛む。試練を通るブォは、かつて9回舐めていたともいわれている。

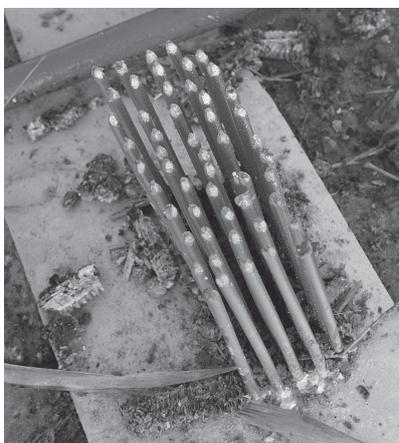


写真4 釘のダバ



写真5 火のダバ



写真6 罌のダバ

④ 犁（ホシグォ）のダバ（写真7） 犁を火に入れ、真っ赤になるまで焼く。ブォは足の裏に油を塗り、並べられた九つの犁を、3回踏む。足に塗る油は重油で、深い傷を負わないようにするためである。筆者は犁の上に、足の形が黒くついたのをみた。一般的に、灼熱の鉄の上に水をかけると、鉄板は黒くなる（写真8）。鉄板の上に黒く足の形がついたのは、足の霊力が火の熱さを抑えたためではないだろうか。

⑤ 油（トソン）のダバ（写真9） 今回の儀礼では、アルコール度の高い白酒が油の代わりに使われた。その白酒をボールに入れ、火をつける。その中に九つの錐を入れ、写真10のように錐を1個ずつ手で取り出す。九つの錐を1グループにして、3回繰り返すと、一つのダバになる。また、油やお湯を沸かし、そこに入れた古銭や針のような鉄製品を中から手で1個ずつ摘みあげることもある。

⑥ 錐（テベニ・ジュ）のダバ（写真10） 度数が高い白酒をボールに入れ、火をつける。火がついていることを確認し、その中に九つの錐を入れる。写真10のように火がついている酒の中から、九つの錐を取り出す。これを3回繰り返す。



写真7 犁のダバ



写真8 灼熱の鉄の上に水をこぼす



写真9 油のダバ



写真10 錐のダバ

⑦ 鎖（デゲスン）のダバ（写真11）線のダバともいう。ダバン・バッシが隣でタルニ（呪文）を読み、自分の霊力で弟子を保護する。その後、鉄の鎖を火に入れ、真っ赤になると、新米ブォが手に油を塗り3回撫でる。このほかに、鎖（デゲスン）のダバの方法は二つある。サランゴワによれば、一つは「鎖を体に巻いて、タルニ（呪文）の力で解く。これを9回繰り返す」方法で、もう一つは、「鎖で体を巻くダバの代わりに、二種類に編まれた9本の紐で体を縛り、そして、それを呪文の力で解く」方法であると述べている（サランゴワ 2019：360）。李亮ブォのイスン・ダバ・フルグ（九つの試練の絵）には、この荒行が描かれてない（白翠英 1998：242）。

⑧ 潜り（シュルゴール）のダバ（写真12）鉄棒で枠をつくり、その鉄棒を綿花で包む。そこに油を塗り、火をつける。火がついている枠の中を3回潜って歩く。サランゴワと満昌は、木の枝を丸めて半円形にし、3本か9本（あるいは3本から5本）の長い刃物をそこに縛っておき、その下を9回潜り抜けるとしている。長い刃物の本数は2人の間で異なっている。

⑨ 刀（ジャドウ）のダバ（写真13）このダバは、儀礼の最後に行われるものである。ジャドウ（草切り用の長い刀）の刃を9段の梯子に、上向きに縛りつけ、その上を登る。



写真11 鎖のダバ



写真12 潜りのダバ



写真13 刀のダバ

この荒行が終了すると、全員一緒に食事をとる。これは共食と呼ばれるものである。供犠羊の肉汁に玉蜀黍を入れ、粥に足す。これを儀礼の参加者、見物者に振る舞う。これは、神々や守護霊たちが食べる肉や粥であるため、霊力のある神聖な食べ物として扱われる。民間では共食することにより、小さな病気が治ったり、福が来たりすると考えられている。

このように9種類のダバは「火・熱さ・刃物」を表した試練となっている。回数は9×9の81回行われなければならない。ただし、九つの試練の内容は、必ずしも定まったものではない。一つのダバを変更しても構わないという。師匠のゾにより、イスン・ダバの内容も異なってくる。次に、今回は行われなかった別の形のイスン・ダバを紹介しよう。

## (2) そのほかのイスン・ダバ

子宮(サバン)のダバ 満昌はこのダバについて「子宮のダバは、2人が両手で2本の棒を横に持ち

上げて体を9回、回転させる」(満昌2014:133)と述べている。サバは子宮という意味で、サバン・ダバは子宮の試練となる。子宮はブォとして生まれ変わることを象徴している。2人が横に持ち上げた木の棒は子宮である。体を回転させる行為は、母親が分娩するときの胎児の動きを思い起こさせる。サランゴワは「イテゲル・ブォによれば、この試練(ダバ)が最初に行われるという。「サバン・ダバ」を「母なるダバ」とも称する。このことも、「サバン・ダバ」の象徴的な意味を裏付けている」(サランゴワ2019:359)という。

柳(ボルガス)のダバ 柳(ボルガス)を通る試練である。このダバについてサランゴワは「やり方としては、2人の人が柳を持って、約1メートル離れて立つ。新米ブォが走りながらすり抜ける。それを9回繰り返す。もし、柳や人にぶつくと失敗になる。これは、ブォとして再生することを表現し、象徴的な意味は「子宮のダバ」と同じである」(サランゴワ2019:360)と記している。

このように、イスン・ダバの内容は、主催者のダバン・バッシにより決まっていくのである。

#### IV イスン・ダバ・フルグ(九つの試練の絵)からみる儀礼

イスン・ダバ・フルグとは、ホルチン地方のシャマニズムの世界観とその実践を表現した絵である。ここでは、サランゴワの『ブォ・シャマニズムの現在』(サランゴワ2019)を参考に、考察したい。サランゴワは「1950年代まで、「イスン・ダバ・フルグ」(九つの試練の絵)は普段、家に祭っていた。しかし、民間で、「イスン・ダバ・フルグ」が1950年代から1970年代にかけて焼かれてなくなった」(サランゴワ2019:364)と述べている。また、サランゴワは2007年に月亮ブォに頼み、複写品の絵を作成したといわれる。このイスン・ダバ・フルグ(図3)の内容をみてみよう。

##### (1) イスン・ダバ・フルグに描かれたダバ(試練)

[21] は釘のダバである。針または釘をびっしり立てたフェルトや板がある。その上で、太鼓を手でもち、ブォの服を着て、素足で試練を通っている。

[23] は油のダバである。燃えている鍋に右手を入れ、何かを取り出そうとしている。左手で太鼓をもっている。これは、筆者がみた、火がついている酒の中から錐を取り出す様子と似ている。

[24] は饅頭のダバである。銅鏡を腰に巻いたブォが右手で持っている饅頭を噛んで、左手で、もう一本の饅頭を持っている。

[25] は火のダバである。ブォの服を着て、太鼓を手でもち、膝まで燃える火(ホジュール)の中に立っている。

[26] は犁のダバである。ブォの服を着て、銅鏡を腰に巻いている。三角の犁を両手、両足に嵌め、頭に被り、歯で噛んで立っている。

[27] は梯子のダバである。刀が付けられている9段の梯子がある。ブォ服を着、太鼓を左手でもった1人のブォが、3段まで上がっている。[28] は梯子の段の9番目つまり頂点に、ブォ服を着た1人のブォが右手で礼拝している。左手を腰にあて立っている。

[29] は鎖のダバである。長い棒を頭の上まで両手で持ち上げた2人のブォがみえる。2人は上半身裸だが、腰にはブォの服をつけ、銅鏡を巻いている。

[30] は潜りのダバである。ブォ服を着て、太鼓を左手にもった1人のブォが、三つ並べた「n」形の物を通り抜けている。「n」の上には三角の旗が立っている。旗の棒の先端は三角になっており、下に白色の鬣（たてがみ）が巻かれている。

[31] は刀のダバである。刀で腹を押し込んでいる。手前に鼻が長い小柄な人間、あるいは動物（背の高さは腰のほど）が立っている。

[32] は剣のダバである。長剣で腹を刺している。この二つは刃の荒行と理解できる。

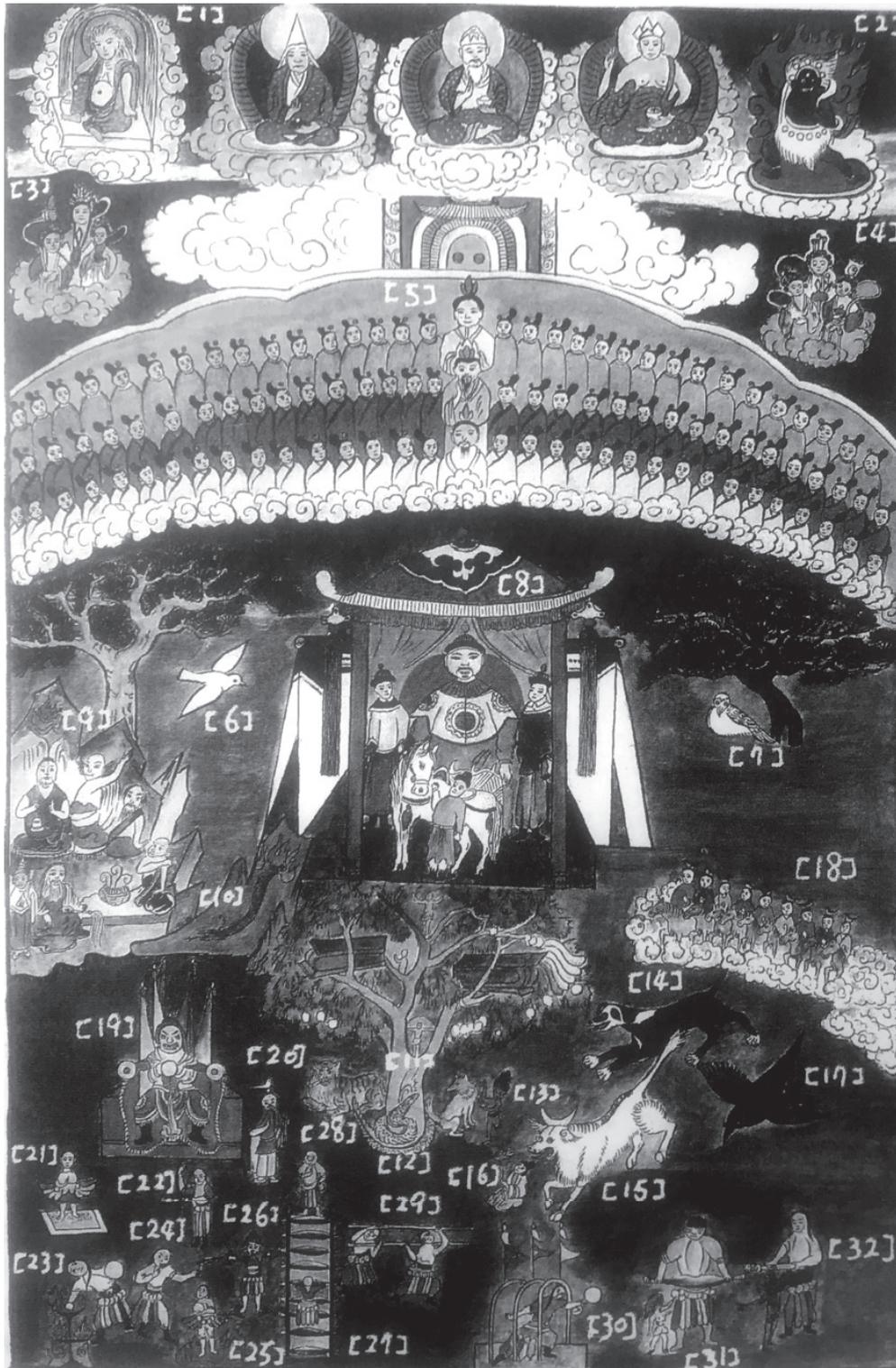


図3 イスン・ダバ・フルグ（九つの試練の絵）（サランゴワ 2019 : 365）

## (2) ダバ（試練）以外の内容

次に、絵に描かれているダバ以外の事項を説明していく。

サランゴワは、絵の [8] の人物について「ジャロード旗の亡きエルデニオソル・ブォの娘セルジメデツマによると、「旧満州」の時代にエルデニオソル・ブォはダルハン旗の王府から近いシンという村で行われた「イスン・ダバ・ダバホ」儀礼に参加した。当時のダルハン王の夫人はジャロード旗出身の人だったので、ジャロード旗からやってきた貧しいエルデニオソル・ブォの、儀礼に奉納すべき家畜とそのほかの費用を免除してくれたという。この語りから、当時、「イスン・ダバ・ダバホ」儀礼を少なくとも旗王が知っていた」（サランゴワ 2019：368）とし、[8] の人物は旗王であると推測している。このことから、このイスン・ダバ・フルグは旧満州時代に行われた九つ試練の内容と現場を描いた絵ではないかと考えられる。

絵の全体は、ブォの世界観が描かれている。絵の最上部 [1] は「4人のマハランサ」と呼ばれ、金剛界の四仏であるともいわれる、エルデニは、マハランサ（サンスクリット mahataja）とは、「四尊の天王というインドの言葉」（エルデニ 1997：65）であるとする。筆者はダライ・ブォが行った儀礼で、この絵をみることができた。縦、横1メートルほどの大きさの「四尊の天王」という絵で、試練場の庭に放置されてあった。これは仏教の受容であることがわかる。[5] で描かれている99の神は、ブォが信仰する99のテングリである。3列の中心にいて、ほかより大きく描かれている3人は、権利者、主宰神、リーダー・テングリを代表している。次に、ブォの世界で最も高い位置にある来世の [9] である。来世では、岩の上に6人が座っており、後ろに1本の生い茂る松の木がある。この6人はダバン・エジドである。儀礼を見守ってくれる、ブォの6人の師匠のことであろう。また、ブォたちの守護霊を招請する際、歌われる神歌の中に登場するチャヒゴル・チャガン・ハダ（火打石の白い岩）があり、その岩の後ろにブォの亡き霊が座る木がみえる。

[11] は、ブォが亡くなり、樹上葬が行われている様子である。木の上には棺と白い円形の銅鏡があり、ブォの服を載せている。現世でブォの死体をばらばらにすると、白雪山にある来世に赴くことができると信じられている。また、これについてウノ・ハルヴァは「ゴールドは世界樹に三つあり、一本は天に、もう一本は死者の国に、もう一本は地上に生えていて、最初のシャマン、ハダ khada はこの地上の樹からシャマンの巫具を受け取ったと語っている。さらに、ゴールド、オロチ、オロッコのシャマンは誰でも、自分が生きるも死ぬもその樹にかかっているという特別な樹を持つ」（ウノ・ハルヴァ 1971：433）と述べている。木の上にいる裸の人とすべてのものは、ブォの靈魂を代表し、これから後継者の守護霊になることを示している。また、木の下にいる動物について、サランゴワは「ブォが治療する際、補助霊になっている」（サランゴワ 2019：368）と述べている。筆者もこれと同じことを、アゴラ・ブォから伺った。近年、ホルチン地域で盛んになっている動物霊は、かつて治療するとき、補助霊になっていたとされる。この補助霊については、悪霊を追い払う治療として今後の課題にしておきたい。

[19] と [20] はイスン・ダバ・ダバホ儀礼を監督するダバン・バッシ（師匠ブォ）である。その中でも [19] はレイチンである。レイチンとは、「座って守護霊を呼ぶ、仏教寺院のチャムを用いる」[サランゴワ 2019：369] 人物である。今回調査したイスン・ダバ・ダバホ儀礼の主催者ダライ・ブォも、同じくレイチンである。しかし、ダライ・ブォは、ブォの服を着て、全過程を立て行っていた。

ここでは主に儀礼に関わる部分を選び、紹介した。そのほか、仏教の受容や動物の精霊について描かれた箇所は今後の課題にする。

このイスン・ダバ・フルグは、旧満州あるいは1930年代に行われたイスン・ダバ・ダバホ儀礼の内容である。約90年を経て、イスン・ダバ・ダバホ儀礼は復活している。この二つの内容を比べると、儀礼の中心的となる「火・熱さ・刃物」という要素は変わっていない。文革期間に宗教は弾圧され、宗教は迷信として禁止された。そのため、イスン・ダバ・ダバホを通ったブォの数は、非常に少ない。しかし、2012年以降になると、経験を積んだブォは、自宅で自らイスン・ダバ・ダバホ儀礼を復活しようと試みている。彼らは、ダバン・バッシや老人から聞いた話を基に復活の儀礼を行っているのである。現在の儀礼は以前に比べ、簡素化されている。針尖と刀刃の鋭さは、軽減されるようになった。これも現代の法律で規制され、安全性が重視されているからである。しかし、ブォがもつ火をコントロールする力や霊力、また治療する力は変わっていない。

イスン・ダバ・ダバホの中心要素である「火・熱さ・刃物」を、再度まとめてみよう。[27]と[28]では、刀が付いた9段の梯子のダバを素足で通っている。また、[31]は刀で腹を押し込んでおり、[32]では長剣を腹に刺している。これについて、ダライ・ブォは「自分は16歳ぐらいのときに、自分の守護霊が治療する様子を見た。そのとき、守護霊は治療のため、自分の血が必要なので、舌を刀で切り、依頼者の病気を治した。その後、皆びっくりした顔でみながら心配していた。しかし、治療が終わると、スライスされた舌が元のように治ったという。今聞いてもびっくりする経験だった。今はそんな強い霊力をもつブォは少なくなった」という。この話を聞いていたフスル・ブォも「自分は1回だけ、舌を切って治療したことがあるというおじさんの話を、当時大学に通っていた甥から聞いた。甥は現場で見ていたけど信じられないので、治療が終わるとわざわざおじさんの舌を確認した。すると怪我はなかった。それで、信じるようになった。これは守護霊のおかげだ」と話してくれた。このように、刀の荒行で刃物を抑える力を得たり、刃物で怪我してもすぐ治ることができたりするのは、治療の霊力のおかげである。また、儀礼の最後のダバは、刀が付いた9段の梯子のダバである。[28]では、梯子の9番目つまり頂点で、ブォ服を着た1人のブォが右手で礼拝し、左手を腰にあて、立っている。梯子の頂点に登ることは、普通の人間から守護霊の力を賜るブォとして、生まれ変わることを象徴している。さらに、霊界に身を置いたことを表している。

もう一つの重要な要素は、火を操ることである。儀礼では、「火の中に入り、灼熱した鏝を噛む」、「真つ赤な犁の上に素足で歩く」、「鎖を撫でる」、「ガルをエスグルフ（蹴る）」、「ホジュールのガルを食べる」、「火がついている酒の中から九つの錐を取り出す」など火に関する試練が多い。これは、ブォが火の統御者であることを端的に示している。また、モンゴル・シャマニズムの中では、火は超自然的な神聖性と巫的な能力を有し、俗から聖に変わる重要な印と試練方法であると考えられている。では、火とシャマンの巫的な能力とは、どのような関係にあるのだろうか。これに関連するエリアーデ(M. Eliade)の考えをまとめてみよう。エリアーデは、シャマニズム文化圏には、次のような象徴的関連があると指摘する。シャマンは肉体的に普通の人々が火に耐えられる限度をはるかに上回る体質をもち、体的にも巫的(精神的)にも神霊と同じ次元に達している。なぜなら、トランスに陥る状態で天上界と地下界を飛翔するシャマンの特有な能力は、神秘的な内的熱を得たからである。シャマンは火を操り支配することによって神秘的な内的熱を獲得・蓄積し、荒々しい破壊力である火の本性を内的な巫的

能力に変化させる。火に耐えられる体はシャマンの欠かせない条件である。シャマンは火の本性を内的巫力に変えられる人物である（エリアーデ 1974：605-608）。火はダバ・ダバホ儀礼で、重要な機能を発揮しているのである。このほか、火はモンゴル・シャマニズムでは、入巫儀礼だけではなく病氣治療や力が強くなることに大きく関わっているといえる。

## V イスン・ダバ・ダバホ儀礼の機能と役割

1930年代から約90年ぶりに、イスン・ダバ・ダバホ儀礼が復活した。ただし、儀礼の内容は簡素化されるなど、変化している。例えば、釘のダバは、かつてはより厳しい荒行であった。しかし、女性ブォが多くなったため、以前とは異なる形式で行われている。また、針尖と刀刃も、前ほど鋭いものでなくなった。といってもイスン・ダバの中心になる要素が「火・熱さ・刃物」であることに変わりはない。イスン・ダバ・ダバホ儀礼で重要なことは、実施する内容ではなく、参加することそのものである。儀礼に参加することにより、ブォとして地位を得る。この儀礼は、新米ブォにとって、自分を1人のブォとして宣言することと、さらに普通の人からブォとして生まれ変わる機会となる。同時に、老ブォにとっても、霊力をアピールし、ブォ文化を伝承していく機会にもなっている。ホルチン地域には、ブォの資格認定証が存在するが、儀礼はそれを発行する根拠となっている。さらに、儀礼に関するエピソードがブォと民衆の間に伝わることにより、ブォ文化は現在まで伝承されてきた。こうしてみると、儀礼は、ホルチン・シャマニズムに欠かせないものになっている。イスン・ダバ・ダバホ儀礼の復活は、民衆やホルチン・モンゴル人の伝統文化を保護していく意識を高めると同時に、ブォ文化の継承者育成の手段になっているのである。

## おわりに

イスン・ダバ・ダバホ儀礼の中心となる要素は「火・熱さ・刃物」である。その中でも、刃の荒行でみせる刀刃を抑える力や治療の霊力は重要なものである。ブォは火を操り、支配することにより、神秘的な内的熱を獲得・蓄積する。荒々しい破壊力である火の本性を、内的な巫的能力に変化させる。火に耐えられる体はシャマンの欠かせない条件である。シャマンは、火の本性を内的巫力に変えられる人物である。イスン・ダバ・ダバホ儀礼では、火に関する試練が最も多い。そのことは、ブォが火の統御者であることを端的に示している。また、梯子の頂点に登ることにより、普通の人間から守護霊の力を賜るブォとして生まれ変わり、霊界に身を置くこととなる。

その儀礼も、現在では簡素化されている。針尖と刀刃は前ほど鋭くなくなった。しかし、イスン・ダバ・ダバホの中心となる要素「火・熱さ・刃物」に変化はない。イスン・ダバ・ダバホ儀礼において重要なことは、実施する内容ではなく、参加することそのものである。儀礼は、ブォ文化の伝承の手段である。民衆やホルチン・モンゴル人の伝統文化を保護していくという意識を刺激することができる。儀礼を通して、ブォは社会的にブォとしての地位を得、民間で認められるようになる。また、儀礼はシャマニズムを活性化させ、その継承者の育成に貢献している。

本論では、仏教の受容や動物の精霊について述べることはできなかった。今後の課題にしたい。

## 注

- (1) ブォというモンゴル語は、モンゴル・シャマニズムの全体を指す呼称である。以前は地域により男女の呼称が異なり、男性シャマンをブォ、女性シャマンをオドガンと称していた。しかし、現在のホルチンでは、男女ともブォと称されるようになった。もう一つの意味は、伝統的なシャマンである。例えば、現在のホルチン地域で、動物霊を守護神とするシャマンはブォとは呼ばれない。
- (2) 「ダバ・ダバホ」の「ダバ」は、「峠、坂」を、「ダバホ」は「通る、乗り越える」という意味である。「ダバ」は、また日常生活の中で、「難問、難関」を象徴し、新米ブォにとっては「試練」を意味する。一つの試練は、一つのダバである。「ダバ・ダバホ」を本論では、「試練を通る」と訳す。
- (3) 張高娃「モンゴル・シャマニズム信仰と民間習俗」(『比較民俗研究』33号、2019年3月)、張高娃「内モンゴルにおけるモンゴル『ボー』の現状の研究」(『歴史民俗資料学研究』24号、2019年3月)に掲載。

## 参考文献

### 日本語

- ウノ・ハルヴァ (田中克彦訳) 1971 『シャマニズム－アルタイ系諸民族の世界像－』三省堂  
サラングワ 2019『ブォ・シャマニズムの現在－内モンゴル・ホルチン地方の新地平』星雲社  
ミルチャ・エリアーデ (堀一郎訳) 1974『シャマニズム古代的エクスタシー技術－』(M.Eliade: Shamanism-Archaic Techniques of Ecstasy, NewYork, 1964)、冬樹社

### モンゴル語

- 泰亦赤兀惕・満昌 『モンゴル・シャマニズム』内モンゴル出版社 2012年  
Tayičiγutai, Mansang mongγol Böge mörgul Öbör mongyol-un keblel-ün qoriy-a 2012  
エルデニ モンゴル・チャム (仏教踊り－筆者注)』民族出版社 1997年  
Erdeni Mongγol čam Ündesüten-ü keblel-ün qoriy-a 1997  
フルレシャ、白翠英、ナチン、ボヤンチョゴラ 『ホルチン・シャマニズム研究』民族出版社 1998年  
KürelŠa, Baičuiying, Način, Buyančuyla, Böge mörgul-ün Šasin Ündesüten-ü keblel-ün qoriy-a1998